水と緑の東京一番の街をめざして
―ゼロメートル市街地・街を暮らしをどう守り育てるか―

NPO ア！安全・快適街づくり 理事　渡邉 喜代美

■次世代との連携　―2011･3･11を深く受けるー

2011年の1月～3月のWS（ワークショップ）は、NPOア！安全・快適まちづくり（2000年設立、以下NPOア！）の歴史からみると、コーナーを回って、バトンタッチをするあの瞬間に似た感じであった。

次世代へどう継承するかを共有するための、中学生も参加したモデルWSが終わった直後、東日本大震災、津波、原発事故に遭遇し、液状化による街の変貌を目の当たりにすることになった。

同世代の子どもたちが尊い命を失うニュースは、WSに参加して地域のリスクを観察し始めたばかりの多感な中学生の心を揺さぶった。葛飾区上平井中学校の生徒有志は、募金活動を開始、区長に被災地へ届けてくれるよう手渡した。親戚の被災支援に行く中学生もいた。理科部の生徒はGIS（地理情報システム）を活用して「水害についての研究」をし、10月には「泣いて笑って深まる絆～友情のハーモニーを奏でよう～」と題して発表をした。

GIS資料の提供者はNPOア！のメンバーでもある東京大学の若き研究者たちである。この若者たちの成果は2012年3月に開催するシンポジウムで発表してもらおうと考えている。

また、地区内の小中学校では、メンバーによる授業の講師や講演活動も始まっている。このような子どもたちへの広がりは、希求（ききゅう）するところで、次世代にこれまでに得た知見を伝えるすばらしい機会となるだろう。

■私たちが住んでいるところは水面下

NPOア！の活動する現在の荒川下流地域は、干潮時でも水面下の地域に何十万人もの人が暮らしているエリアである。かつては、気持ちのよい川風を受けて、川とともに暮らし、川の恵みもうけたこの地域は、稲穂がなびく田園地域であった。江戸小紋の人間国宝小宮康孝さんは、先代の人間国宝康助さんが、「江戸小紋の色は水質に関係が深い」といい、ここに居を構えたという逸話を紹介し、川と共に暮らすことができた時代を懐かしんでいる。それが工業用水の過剰なくみ上げに伴う地盤沈下現象により、いわゆるゼロメートル市街地が形成されたが、広域にわりゆっくりと低地化したため被害が見えにくくなっている。

上の写真（写真提供：国土交通省荒川下流事務所）の井戸は地盤の沈下を記録する貴重なもの。地域・NPOア！・ゼロメートル市街地研究会（以下ゼロ研）の働きかけと東京都の協力や民間の技術を借りて区の文化財として現在地（東京都建設局第5建設事務所敷地内）に保存が決まった。

1947年9月7日カスリーン台風による水害状況（東京都水害誌）

この地域に古くから住む人は、カスリーン台風（1947年）で街が水没した経験をもつが、新しい住民は知らず、また地盤沈下による痛みも感じていない。

■“水と緑あふれる安全で快適な街”をめざして

地球環境の変動を意識的に捉えることが重要な時代、人知を超える地震水害や水位上昇などによって、安心のはずの堤防が破堤した時、逃げ場を持たない低地帯の人々は、そのときはじめてゼロメートル地帯の無防備さ、恐さを知ることになる。しかし、事前に地域のリスクを知っておけば災害時の初期行動がスムースにでき、尊い命を守ることができる。今、事前の最善策が求められている。

ＮＰＯア！は、ゼロメートル市街地の実態に理解を深め、ひいては克服し、ゼロメートル市街地を“水と緑あふれる安全で快適な東京一の街”にしようとの思いで、NPO、地域、専門家、研究者、行政と連携して、新しい成長を目指している。

東京の地図を広げると特徴的なくねくねと原型が残る中川はすばらしい環境資源であると同時にゼロメートル市街地の治水対策が不可欠。図右手は新中川。左手が荒川放水路と中川放水路。いずれの川面より街は低地にある。

（撮影塩崎）
最近中川七曲に添ってできたデッキでつりをする人々。プランターに緑を植え込む準備が地域協働で始まり、運営にも参加する。

■地域主体のベースづくり

地域のことは地域が考え発案し実践していかなければ、地域のリスクマネージメントはおぼつかない。

NPOア！は、2000年創立以来非常にアクティブに活動を展開している。たとえば、低地であることを示す水位表示板のモデル設置。これは後に行政等によって区内外に広がる。葛飾区のハザードマップの副読本NPOア！と区の協働作成の小冊子「洪水に備えて」はマップと共に区全戸配布された。区内巡回パネル展示は地域とのコミュニケーションに繋がった。

2006年から11年まで毎年行っている、活動の骨格であるWSと体験学習、総括シンポジウムでくくる一連の活動は、NPOア！、ゼロ研、地域と協働で行い、ゼロメートル市街地のリスクの共有、具体的な対策を考える場となった。

第1期（2006～2007）は水害に対して皆で何ができるか、自助共助の考え方についてWSを行い、リスク認識の適正化を図った。

ボートを使って乗船下船訓練。町会や地域消防団によって（撮影渡邉）

第2期（2007～2008）は、短期的対策を実践に移し、長期的な対策を検討した。 そこで生まれたのが以下のまちづくりアクション「新小岩宣言」であった。

1．ゼロメートル市街地における大規模水害への備えを地域からはじめます。
2．お年寄りから子どもまで多世代の交流を進めコミュニティの元気を再生します。
3．行政を超えた、地域どうしの協力をすすめます。
4．住民・地域の小中学校、ＰＴＡ，ＮＰＯ，企業、行政は、お互いに協力し、大規模水害に備える行動計画の具体化に向けた活動を行います。

この宣言は、大規模水害に対する取り組みの新スタートでもあった。

第3期（2009）はGISを利用して防災地理情報の作成と共有化、地域主体の対策の実践･意識啓発の深化、地域の底力の再生を試みた。GISを活用するには、研究者や専門家との連携は欠かせない。年配者でも中学生でも使いこなせることが大事なポイントだが、老若男女､意外とあっさり使いこなした。中学生も活用し、冒頭の研究を行った。

第4期（2010～）は長期的な対策を具体的に検討した。シンポジウムでは防災意識と備えの持続性を考える次の行動に向けて、再び、下記の「新小岩行動宣言―1」を共有した。宣言は活動の羅針盤となる。

1．「広げる」新小岩から世界へ向けて活動を広げます。
2．「深める」これまでの経験を地域に深めます。
3．「長期的な展望に立つ」歴史から、地域から学び未来に向けて行動します。
4．「地域主体」地域が主体となってさまざまな連携をしながら進めていきます。

■これからの展開のひとつ―協議会の立ち上げ―

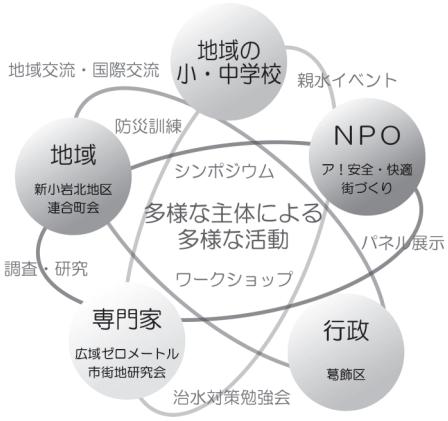
2010年5月から「葛飾区西新小岩三丁目周辺地区における安全・快適街づくり勉強会」と題する勉強会を葛飾区と共同で開催している。勉強会は地域･専門家･NPO・行政・広域ゼロメートル市街地研究会の多様な知見の結集場であった。1年延10回に及ぶ勉強会では、ゼロメートル市街地のまちづくり再考のため分野をこえて自由な意見交換をし、地域のニーズに会った対策を提言した。

そこから生まれた課題は①安全高台避難地確保の検討②浸水対応型建築物の整備の検討③近隣関係継続計画（LCCP）の検討④輪中（わじゅう）会議や輪中基金の検討など、ゼロメートル市街地のニーズに即したテーマが掲げられた。これらが機会となり、2011年度から「新小岩北地区輪中まちづくり事業」として取り組むために協働型の「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」を立ち上げることになった。

■ただ今の活動の展開はこんな図になる

3・11の凄まじい体験は、“水と緑の東京一番の街をめざして、私たちの街を、暮らしを、尊い命を、私たちでどう守り育てるか”について、これまで以上に地域主体で考える強い契機になっている。一つ一つでは小さい。一人の100歩より100人の一歩のため、連携が欠かせない。

現状を図にするとこんなイメージである。



このような活動方法は、葛飾モデルにとどまらず、新しいあり方として内外のゼロメートル市街地に生かし、展開していけるだろうと考えている。

■お問合せ先：事務局

特定非営利活動法人「ア！安全・快適街づくり」
〒124-8535 東京都葛飾区西新小岩３－５－１
TEL・FAX：03-3696-7480
http://www.banktown.org/index.shtml
【連携研究会】
「広域ゼロメートル市街地研究会」（ゼロ研）
http://kato-sss.iis.u-tokyo.ac.jp/zero/

渡邉 喜代美（わたなべ きよみ）

都市居住研究室主宰、NPOア！安全・快適街づくり理事、広域ゼロメートル市街地研究会メンバー、UIFA・JAPON 委員、NPO コレクティブハウジング社(CHC)監事(＊現在 CHC/PJ では東日本被災地「南三陸町」にて「仮設から始めるコミュニティづくり支援事業」を行っている）他